

理科 I 類 1 年 13-15 組, 28-30 組 (担当・関口)

持ち込み: 不可

解答用紙: 1 枚, 問題用紙: 1 枚, 計算用紙: 1 枚

○問題は 5 問あります。

1.  $A = \begin{pmatrix} 0 & 0 & -1 \\ 17 & 19 & 0 \\ 25 & 28 & 0 \end{pmatrix}$  とする。

(1)  $A$  の逆行列を求めよ。

(証明は (2) で述べるものとし, まず, 解答のみを記述してください。)

(2) (1) の証明を与えよ。

2. 6 次行列  $A$  の  $(i, j)$  成分を  $a_{ij}$  と表すことにする。

(1)  $\det A$  の展開式の次の形の項における  $\bullet$  に入る数は何か。(この問題については解答のみで良い。)

$$a_{43}a_{52}a_{34}a_{1\bullet}a_{61}a_{26}$$

(2)  $\det A$  の定義式で (1) で与えられる項の符号を求めよ。(証明は (3) で述べるものとし, まず, 解答のみを記述してください。)

(3) 行列式の定義を述べ, それに基づいて (2) で述べた自分の解答を論証せよ。

3.  $\mathcal{P}_n$  を  $n$  次以下の実係数多項式からなる線形空間とする。

$$\mathcal{P}_n = \{a_0x^n + a_1x^{n-1} + \cdots + a_{n-1}x + a_n : a_j \in \mathbb{R} (j = 0, \dots, n)\}$$

(1)  $\mathcal{P}_3$  は何次元か。解答の際は, その結論に至った理由も合わせて述べよ。

(2)  $\mathcal{P}_3$  に属する多項式  $f(x)$  に対して  $(Tf)(x)$  という多項式を以下の積分で定義する。

$$(Tf)(x) = \int_{-1}^1 (x-t)^2 f(t) dt$$

このとき, 線形写像  $T$  の核 ( $\text{Ker } T$ ) の次元を求めよ。

(証明は (3) で述べるものとし, まず, 解答のみを記述してください。)

(3) (2) で述べた自分の解答を論証せよ。

4. 未知数を  $x = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$  とする斉次連立一次方程式  $Ax = 0$  の解の自由度と, ベクトル  $a_1, a_2, \dots, a_n$

の線形独立性について以下の問 (1), (2), (3) に答えよ。

ここで,  $A$  は  $n$  個の  $l$  次の数ベクトル  $a_1, a_2, \dots, a_n$  を横に並べた  $l$  行  $n$  列の行列とする。すなわち,

$$A = ( a_1 \quad a_2 \quad \cdots \quad a_n )$$

とおいた行列とする．また  $n, l$  は 3 以上の自然数とする．

(1) 以下の文章のうち正しいものを選び．

(イ)  $Ax = o$  の解の自由度が真に正であるとき， $a_1, a_2, \dots, a_n$  は線形独立である．

(ロ)  $Ax = o$  の解の自由度が真に正であるとき， $a_1, a_2, \dots, a_n$  は線形従属である．

(ハ) (イ) も (ロ) も正しくない．

(2) (イ)  $Ax = o$  の解の自由度が 0 であるとき， $a_1, a_2, \dots, a_n$  は線形独立である．

(ロ)  $Ax = o$  の解の自由度が 0 であるとき， $a_1, a_2, \dots, a_n$  は線形従属である．

(ハ) (イ) も (ロ) も正しくない．

(3) (1), (2) の証明を与えよ．

5. 行列  $A$  を

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 1 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 1 & 1 & 0 \\ 1 & 1 & 0 & 1 & 1 \end{pmatrix}$$

とする．

(1)  $A$  の余因子行列の階数 (ランク) を求めよ．

(2) (1) の解答の論証を与えよ．(解答では，論証に必要な，余因子行列の一般的性質 (たとえば，積  $A\tilde{A}$  の公式) を明快に述べた上で，説明すること．)

注．証明では「明らか」，「定理から分かる」のみの解答より，「ここまでは証明できたが，この先は かがどうか分からないので，証明を進めることができない」など，「どこまで分かっている，どこから分からないのか」を明確にしてあるものの方を高く評価します．

===問題はここまです．===

解答

$$1. (1) A^{-1} = \begin{pmatrix} 0 & 476 & -475 \\ 0 & -475 & 476 \\ 1 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$(2) \det A \stackrel{\substack{1 \text{ 行目に} \\ \text{に関して展開}}}{=} (-1) \begin{vmatrix} 17 & 19 \\ 25 & 28 \end{vmatrix} = -(17 \cdot 28 - 19 \cdot 25) = -476 + 475 = -1$$

また,  $A$  の余因子行列  $\tilde{A}$  を求めると,

$$\tilde{A} = \begin{pmatrix} 0 & -476 & 475 \\ 0 & 475 & -476 \\ -1 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

ここで,  $A\tilde{A} = (\det A)E$  より,  $A^{-1} = \frac{\tilde{A}}{\det A}$  だから,

$$A^{-1} = \frac{-1}{\tilde{A}} = - \begin{pmatrix} 0 & -476 & 475 \\ 0 & 475 & -476 \\ -1 & 0 & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 476 & -475 \\ 0 & -475 & 476 \\ 1 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

2. (1) 5

(2) +

(3)  $A$  の行列式は, 次式で定義される.

$$\det A = \sum_{\sigma \in \mathfrak{S}_6} (\operatorname{sgn} \sigma) a_{\sigma(1)1} a_{\sigma(2)2} \cdots a_{\sigma(6)6}$$

よって, (1) で与えられる項の符号は,  $\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \\ 5 & 6 & 4 & 3 & 2 & 1 \end{pmatrix}$  とおいたときの,  $\operatorname{sgn} \sigma$  である.

$$\begin{aligned} \sigma &= \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \\ 5 & 6 & 4 & 3 & 2 & 1 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \\ 5 & 6 & 3 & 4 & 2 & 1 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \\ 1 & 6 & 3 & 4 & 2 & 5 \end{pmatrix} \\ &\rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \\ 1 & 6 & 3 & 4 & 5 & 2 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

となることにより,  $\sigma$  は偶置換であることが分かる. すなわち  $\operatorname{sgn} \sigma = 1$  となり, (1) で与えられる項の符号は + である.

$$3. (1) \mathbf{x} = (x^3 \ x^2 \ x \ 1), \mathbf{a} = \begin{pmatrix} a_0 \\ a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix} \text{ とおくと, } \mathcal{P}_3 = \{\mathbf{x}\mathbf{a} : \mathbf{a} \in \mathbb{R}^4\} \text{ となる.}$$

$$\text{ここで, } \mathbf{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_4 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \text{ とおくと, } \mathbf{a} = a_0\mathbf{e}_1 + a_1\mathbf{e}_2 +$$

$a_2\mathbf{e}_3 + a_3\mathbf{e}_4$  と表すことができるから,  $(x^3 \ x^2 \ x \ 1)\mathbf{a} = \mathbf{x}(a_0\mathbf{e}_1 + a_1\mathbf{e}_2 + a_2\mathbf{e}_3 + a_3\mathbf{e}_4) = a_0\mathbf{x}\mathbf{e}_1 + a_1\mathbf{x}\mathbf{e}_2 + a_2\mathbf{x}\mathbf{e}_3 + a_3\mathbf{x}\mathbf{e}_4$  となる.

以上より,  $\mathbf{x}\mathbf{e}_1, \mathbf{x}\mathbf{e}_2, \mathbf{x}\mathbf{e}_3, \mathbf{x}\mathbf{e}_4$  は線形独立で,  $\mathcal{P}_3$  の任意の元はこれらの線形結合で表される.

ゆえに,  $\langle xe_1, xe_2, xe_3, xe_4 \rangle$  は  $\mathcal{P}_3$  の基底であるから,  $\mathcal{P}_3$  は 4 次元. ■

(2) 1 次元

(3)  $f(x) = a_0x^3 + a_1x^2 + a_2x + a_3$  ( $a_j \in \mathbb{R}, j = 0, 1, 2, 3$ ) とおく.

$$\begin{aligned} (Tf)(x) &= \int_{-1}^1 (x-t)^2 f(t) dt = \int_{-1}^1 (x^2 - 2xt + t^2)(a_0t^3 + a_1t^2 + a_2t + a_3) dt \\ &= \int_{-1}^1 \{a_0t^5 + (a_1 - 2a_0x)t^4 + (a_2 - 2a_1x + a_0x^2)t^3 \\ &\quad + (a_3 - 2a_2x + a_1x^2)t^2 + (a_2x^2 - 2a_3x)t + a_3x^2\} dt \\ &= 2 \int_0^1 \{(a_1 - 2a_0x)t^4 + (a_3 - 2a_2x + a_1x^2)t^2 + a_3x^2\} dt \\ &= 2\left\{\frac{1}{5}(a_1 - 2a_0x) + \frac{1}{3}(a_3 - 2a_2x + a_1x^2) + a_3x^2\right\} \\ &= 2\left\{\left(\frac{1}{3}a_1 + a_3\right)x^2 - 2\left(\frac{1}{5}a_1 + \frac{1}{3}a_2\right)x + \left(\frac{1}{5}a_1 + \frac{1}{3}a_3\right)\right\} \end{aligned}$$

ここで,  $(Tf)(x) = 0$  が恒等的に成り立つとき,  $\frac{1}{3}a_1 + a_3 = 0, \frac{1}{5}a_1 + \frac{1}{3}a_2 = 0, \frac{1}{5}a_1 + \frac{1}{3}a_3 = 0$  すなわち,  $a_1 = a_3 = 0, 3a_1 + 5a_2 = 0$ .

このことから,  $\text{Ker } T$  の任意の元は,  $sx \begin{pmatrix} 5 \\ 0 \\ -3 \\ 0 \end{pmatrix}$  ( $s \in \mathbb{R}$ ) と表せる.

以上より,  $\langle sx \begin{pmatrix} 5 \\ 0 \\ -3 \\ 0 \end{pmatrix} \rangle$  は  $\text{Ker } T$  の基底であるから,  $\text{Ker } T$  は 1 次元. ■

4. (1) (ロ)

(2) (イ)

(3)  $a_1, a_2, \dots, a_n$  が線形独立のとき,  $Ax = o$ , すなわち  $x_1a_1 + x_2a_2 + \dots + x_na_n = o$  の解は  $x_1 = x_2 = \dots = x_n = 0$ , すなわち  $x = o$  のただ一つであるから, 解の自由度は 0 である. よって, 「 $a_1, a_2, \dots, a_n$  が線形独立であるとき,  $Ax = o$  の解の自由度は 0 である .」の対偶である (1) の (ロ) も成立する.

次に,  $a_1, a_2, \dots, a_n$  が線形従属のとき,  $Ax = o$ , すなわち  $x_1a_1 + x_2a_2 + \dots + x_na_n = o$  の解に,  $x_1 = x_2 = \dots = x_n = 0$ , すなわち  $x = o$  ではないものが存在する.

ここで, 「解の自由度が 0  $\iff$  解はただ一つ存在する」であるから, 「解の自由度が正  $\iff$  解は二つ以上存在する」となる.

以上より, このとき解の自由度は真に正である.

よって, 「 $a_1, a_2, \dots, a_n$  が線形従属であるとき,  $Ax = o$  の解の自由度は真に正である .」の対偶である (2) の (イ) も成立する. ■

4. (1) 5

(2)  $A$  の余因子行列  $\tilde{A}$  に関して,  $A\tilde{A} = (\det A)E \cdots (*)$  が成立する.

ここで, 計算により  $\text{rank } A = 5$  と求められるから,  $A$  は正則行列で逆行列  $A^{-1}$  が存在する.

(\*) の両辺に左から  $A^{-1}$  を掛けることにより,  $\tilde{A} = (\det A)A^{-1}$  が得られる.

$(\det A)A^{-1}$  は基本変形を施すことで  $A^{-1}$  に変形できるから,  $\text{rank } \tilde{A} = \text{rank } A^{-1}$  となる.  
 $A^{-1}$  には逆行列  $A$  が存在するので, 正則行列であるから,  $\text{rank } A^{-1} = 5$ .  
ゆえに,  $\text{rank } \tilde{A} = 5$  ■